

## 韓国現代小説の流れと特性

孫章純／岸井紀子訳

私たちが国の文学における散文の伝統は、日本の三六年にわたる植民地統治による徹底した検閲と、私たち固有の文と言語の抹殺とによってしつかりと根を張ることができなかった。

一九世紀後半から始まる西欧勢力の流入に日本のように素早く適応できなかった韓国が強硬に抵抗し在来の価値秩序をより確実に固守しようという対応をとったことで、散文の伝統はますます確立されず、根づきもせず、その過程で引き起こされた葛藤と挑戦があっただけである。近代文学の発火点は創作の自由にある。それを失った韓国文学は、日帝治下で主体性や土着化よりも、日本化した西欧文学の論理のほうにしたいに関心を傾けながら、かろうじて命脈を維持し成長してきた。私たちにとって散文文学は解放後の三八年間によくやく根づいたものである。私たちの文学はこの短い期間に経済と同様急成長した。世界のさまざまな傾向の文学を涉猟し、その影響の中で創作しながら。

大衆の生活に大きな変化が起り、現代人の複雑な意識構造を反映した私たちの散文にも、自ずと読者離れを防ぐための変化が起り始めた。ここで言う変化とは、まず日帝の束

縛から自由になったということ、そして三八度線によって国土が分断され緊張状態にあったのが、ついに六・二五動乱(朝鮮戦争)という砲火の対決にまで発展し、その後血に染まったこの地に休戦線という新たな境界線が設定され、離散家族たちは統一を念じ、現実の中で強く生きていくということである。だから私たちにとって唯一の希望とは民族の統一であり、私たちはそれを目指す生活の意欲の中であらゆる苦難と逆境を克服し、そこで歴史的な宿命を甘受する賢さを育みながら生きていくのである。

民族と大衆の生活の変化は、必然的に文学も変化させた。解放と動乱は、真に私たち民族に生活の能動性と、直接的・現実的に思考する方法を教えてくれた。そこで静的で観照的だった近代文学にたいして、現代の私たちの文学は目を見張るほど発展し変貌しながら、足元に火がついているような緊迫した歴史的運命と対決し超克すべき、大転換過程の特殊な形成期には創造的機能をつくすことはできないという厳然とした現実をも認識するようになったのである。私たちの文学は飛躍の契機を解放と動乱という歴史的な事件の中で得、このあらゆる苦難に打

ち勝ち克服したところに強靱な主体意識が生まれた。

主体性の確立は、何よりも伝統の正しい継承を土台にしなければならず、その次には国境と民族を超越した普遍的な人間性が土台となった民族文学を打ち立てることにある。西欧現代文学の批判的な摂取と、伝統の正しい継承を通じた主体性の確立という、このふたつの大きな問題を互いに密着させ統一しようとする動きは現在まで続いている。韓国文学が普遍性一辺倒から特殊性を強調し始めたのは最近のことである。普遍性が世界文学を意味するとしたら、特殊性は韓国文学を指す。

韓国文学はかつては分断のない統一された民族の形成を希求しながら、皮相的な外面や表象の描写だけに終わっていたのにたいして、回復された主体性により、内面の意識世界にまで分析し入っていく、いわゆる心理主義文学と、直接的行動的な人間を民族的に形象化する現代文学に移行してきた。自ら歴史の流れの先頭に立ち、民族的な運命の契機を二度も越えて強く生きてきた民族魂を創作に反映するようになったのである。人間的な内面の自我意識と新しい民族性との調和を模索し、戦後偽善的なものと偽善的なものに正面から対決しながら、新しい人間を提示しようとする模索し、西欧の主知的なものとの私たちの民族的なものが融合した民族文学の現代的な方向を真摯に模索する小説が現れた。

また、民族的な悲哀が現代的な知性で「ヘイメージン」されている事実も見ることができる。それらの内面には、現代文学の本質的な把握と私たちの文学の新しい方向の模索が見られる。

私たちの文学はこうして短時間の間に西欧が第一次、第二次世界大戦を前後にして経験したふたつの「ヘモメント」をつむじ風のごとく一度に経験したのである。解放と混乱と無秩序を生み、世代と世代が互いに断絶しながら、二〇世紀後半になり、西欧文学が「ヘニヒリズム」と不条理な現実に対し、これを内面的に超克することで分裂しない統一した自我をひとつの極限的な焦点に密着させ、へ形而上学の中で人間の存在を立証しようとする精神があったとするならば、私たちの文学は、世界の思潮の混乱と不安及びそれによって発生したニヒリズムを超克し、不条理な現実を止揚していく人間の形成化を追求してきた。西欧の文学がすべての人間に通じる自我の存在とその擁護にあるならば、私たちの文学は民族的なものと密着した人間の形象化にあるのである。

外来文学に対立する民族主体による美学を確立することは、次のような対比を克服してこそであった。西欧文学が人間の内部の問題を追究するとき、韓国文学は社会的な問題を追及し、西欧の小説が思弁的で観念的な手法を用いるとき、韓国小説は物語中心であり、西欧の小説が実験的的技巧的な傾向のとき、韓国小説は叙情的傾向をとった。また、西欧の文学がメカニズムを批判するとき、韓国小説はメカニズムを導入しなければならなかった。

私たちの現代文学は一九六〇年の四・一九学生革命と五・一六軍事革命を経験した後、特に類例を見ない変化を経験し、この激動する社会の変化の過程の中でも絶えず特殊性を模索してきた。また、外部の世界と未来の世界に対する展望をもてるようになる過程で、私たちの文学が模索すべき方向に対する自覚

が生まれた。

私たちの現代文学の特徴的な傾向を見ると、第一に歴史の社会的な認識がある。六〇年代中盤に完結した安壽吉の『北間島』と七〇年代に発表された朴景利の『土地』は民衆の生を主体にしている。二つ目には、朝鮮戦争に対する省察である。それは、戦争を経験したこと、およびその経験を通して成長した世界に対する認識と、依然として維持されている分断、冷戦体制に対する抗議である。これは韓国の歴史的な条件であり、韓国人を支配している強迫観念でもある。洪盛原の『南と北』がその代表的な例である。三つ目は、疎外階層の生である。社会変化から落伍したり根を引き抜かれた人々の非人間的な生は、七〇年代文学のもっとも熱い関心の対象のひとつである。その代表的な例が趙世熙の『こびとが打ち上げた小さなボール』という作品である。四つ目に知識人の悩みがある。それは現在の韓国に対する知的省察であり、彼らの思考と行動は彼等自身だけのことではなく、普遍的な人間条件に対する洞察を反映している。崔仁勲の『広場』、李清俊の『噂の壁』、李文烈の『ひとの子』、筆者の書いた長編『韓国人』がその例である。以上は韓国現代文学の傾向をおおまかに列挙してみたのだが、次に韓国現代文学の特性とその特性をよく表わした作家たちを紹介しよう。

現実の社会的な関心を批判して、人間の内面的な救いが文学のもっとも高い価値を形象化し、東洋の伝統的な世界観が今日いっそう切実に求められると主張して、在来の文学的価値観にもっとも忠実な作家に金東里がいる。五〇年代の彼の重厚な文学的作業は、土俗的な韓国人に対する探求であり、

彼にとつてもっとも重要なテーマは人間が宗教を通してどのように救われるのかという問題だった。彼の代表的な作品『乙火』は、自然信仰で韓国人の伝統的な世界観を集約するシャーマニズムが、西欧のキリスト教によって押し出される文化的な観点を示しているが、彼がこのとき描写するキリスト教も、やはり韓国的な形でシャーマニズム化したものである。現代史の変遷にもかかわらず韓国的東洋的な世界観から人間の飽くなき救いへの意志を追求するのが彼の小説世界である。

一貫して職人的な文学精神の純潔性に固執する黄順元の作品世界は、模範的な文体修練を通して韓国散文の美の領域を最大限に広げ、韓国的な叙情をうまく描き出している。自然主義と浪漫主義を結合した象徴主義が彼特有の文学的世界を作り、その代表的な作品は短編「驟雨」である。

四・一九が起きた年の、自由な雰囲気の中で書かれた崔仁勲の問題長編小説『広場』は、普遍的な理念がなく個人主義的な堕落だけが支配する韓国社会に懐疑を感じて越北してはみたものの、そこには個人はなく、理念の独裁だけが支配する現実にも幻滅を感じ、朝鮮戦争中に捕虜として第三国を選択したけれども航海中に海に投身自殺をするひとりの若い知識人の絶望を通して、異質の理念と体制に分断された南北が対峙し衝突している韓半島の悲劇的な内戦状況に対する根源的な省察をしている。

李清俊の『噂の壁』は、有望な詩人作家が文章を書けず精神病患者として入院することになる原因を追及し、相手が国軍なのかバルチザンなのか正体を表わさなまま狙う銃口の前で、自分がどちら側かを答えなければならぬ死の恐怖を少年期に

経験した人物の潜在した不安が、大人になってふたたび再発するのを明らかにすることによって、今日まで維持されてきた戦争体制によって人間がどのように抑圧されるかを証言している。

それ以外にも本格的な大河小説として、一世紀に渡る韓国民族史の全貌を収めようという野心に成功している朴景利の『土地』、三年余りにわたる朝鮮戦争を正面から扱い、その生々しい戦争史と人間史、そして社会史を見せてくれる洪盛原の大河小説『南と北』がある。

筆者の書いた『韓国人』は、韓国の激動期である四・一九と五・一六革命の渦中で、西欧文明と私たちの文化との混合文明に葛藤と混乱を感じる知性人が、苦悩し、彷徨して自我を省察し、未来の韓国人像を確立するに至る、一言で言えば、韓国人のアイデンティティーを探す心理小説で、この小説にはアメリカ留学をしたひとりの男とフランス文学を学ぶ女が主人公として登場し、韓国的な意識構造とアメリカとフランス型の思考方式の、三つの類型が激突し、拮抗・対立して葛藤に陥る過程が、当時の韓国の知性人たちの精神風土を象徴するものとして描写されている。

韓国における現代文学の歴史はわずかに二世代余りであるが、その短い期間に、特にこの十五年程の間に得た成果は独特で、かなり水準の高いものだとと言える。それは、世界文学の次元で照らしてみても十分に共感を得るほどの普遍性をもっているものと確信する。ただ、言語の障壁と翻訳上の問題のために外国に紹介されていないことが韓国文学のためには不幸なことである。万一、将来西欧の言語に翻訳されたなら、それ

らの文学は世界文学に必ず寄与するものと思われる。

私たちの文学の課題と現代的な小説の展望は、伝統と現代が密着した主体的な新しい民族精神を土台に発展して行くことにある。このことは私たちの民族的なリアリズムでもある。そのためには文学の普遍性と特殊性をうまく調和させた創作が望ましい。

私たちには幸いにもまだ書きたい、書かなければならない言葉とテーマが山積している。韓国に生まれた作家たちにとって、これはこれ以上無い幸運である。日本の侵略という歴史的な特殊状況のため散文の伝統が短かったという脆弱点を開拓する余地が多いことで、この禍を福と転じ、いまだ南北韓の対立でイデオロギーを扱うことがタブーであればあるほど、今後我々作家たちが創作していく素材が多く残っているのである。しかし小説技法とか美学的な面では世界の水準にすでに追いついているので、未開の土着性だけを私たちの特性として世界文学にさらすことを多分我々作家たちは受け入れないだろう。よしんば経済発展ではまだ均衡を成し遂げていない文化の断層があるうとも、こうした多くの可能性によって私たちには生の意欲と希望とともに生氣と活気が満ち溢れている。

私たちには、まだ掘り起こされていない鉱脈と開拓も開墾もできていない荒野の沃土が無数に有り、私たちの頭の中には研かれていない宝石が無数にある。それこそが豊かな文学的素材である。

筆者は七四年度に奥地から奥地へ世界一周をした。その後フランス政府の招請を受けてパリに一年間滞留する間に西欧文明の廃頽を身をもって体験した。それはともすれば高度に発達し

た文明の限界であり、病弊であるかもしれない。西欧の小説はすでに存在理由を失うほどに主潮なく彷徨しており、おもしろい小説や新しい美学や問題性のあるテーマも出尽くしてしまつてノンフィクションやテレビドラマに多くの読者を奪われている。すでに書き尽くされ、それ以上書く小説がなくなつてしまつたのかもしれない。とは言つても、人間の生というものは、いまだその内容が無尽蔵で深奥で、発掘によつて書くに値し、読者の関心を引く小説はいくらでもあるかもしれない。けれども、それを探し出すのは容易ではなく、そうした素材が多いわけでもない。

だからこそ私たちのこうした特殊な条件で、何よりも世界文学の普遍性と私たちの文学の特異性を絶えず追求し、それを適切に書いていく努力が必要である。そうした作品こそ、私たちの文学の発展と世界化に寄与するところが大きいだろうと思われる。

そうなるためには何よりも私たちの文学の海外翻訳がしっかりと為されなければならない。適切で成功した翻訳だけが私たちの小説の光輝を照らし出せるからである。

孫章純（ソン・チャンスン）

作家。一九三五年ソウル出生。ソウル大学仏文科、フランスソルボンヌ大学大学院で現代フランス文学を研究し、一九六九年から九一年まで韓陽大学フランス文学教授として在職した。一九五八年短編「立像」、「転身」を『現代文学』に掲載して登壇。女性作家にはまれなスケールの大きな物語構成と速度感のある文体で欲望の核心である愛憎と実存の問題を社会性の濃いイデオロギーの問題とともに扱っている。代表作に「韓国人」「野

望の女」小説集「対話」などがあり、「韓国人」は仏訳出版されている。また、最新作「水の上に浮かぶ都市」は英訳出版も予定されている。韓国女流文学賞、韓国ペンクラブ文学賞などを受賞している。

